

大学の構成員に対する効果的な広報方法とは？

What is an effective method about publicity activities to members of a university?

和嶋 雄一郎*¹
Yuichiro Wajima安部 有紀子*¹
Yukiko Abe(株)石田大成社
Ishida Taiseisha Inc.齊藤 貴浩*¹
Takahiro Saito*¹ 大阪大学 未来戦略機構 戦略企画室

Strategic Planning Office, Institute of Academic Initiative, Osaka University

In order to announce projects in a university for a member of the university, we tried some methods (designs for easy to understand, various access patterns: URL, QR, keyword search, etc., various places putting up a poster: a notice board, the wall for toilet booth, etc.). In this study, we analyzed what method is more effective about publicity activities in the university.

1. はじめに

近年、大学では、大学が保有している様々なデータを集計・分析し、そこから得られた結果を利用したエビデンスに基づく意思決定や評価体制の構築が求められている。その中で、**Institutional Research** (以下、**IR**) が注目を浴びている。**IR** とは機関研究のことで、組織の持つ様々なデータを収集・分析し、組織に役立つ情報を提供する活動のことである。大学での **IR** は、大学を組織として捉え、教育研究等の活動をデータで表現し、その情報を大学内外の各層の意思決定者に提供することで、大学全体としての効果的なマネジメントと価値最大化に役立てること研究のことになる。大学において **IR** を展開し、「大学をデータみる」という活動の元に、意思決定を行っていくことが今後更に求められていくと思われる。

しかし、現在の大学の構成員には、「大学をデータでみる」という習慣があまりないのが現状である。そこで、大阪大学では、「大学をデータでみる」という習慣をつけるためのきっかけをつくるために、「**IR**×(かける)プロジェクト」を立ち上げた。この「**IR**×プロジェクト」では、「大学をデータでみる」ことに興味を持たせ、その結果、大学の構成員に「大学をデータでみる」という行動が現れるようになることも目的の 1 つとしている。具体的には、ポスター等によって「大学をデータでみる」ことに興味を持たせ、より詳細なデータが掲載された Web ページの閲覧行動が促されることを「**IR**×プロジェクト」には期待されている。「**IR**×プロジェクト」では、ポスター等の配布、掲示方法を様々な形で展開している。大学の構成員がポスター等の情報を目にする環境の違いによって、Web ページの閲覧行動に差がみられる可能性があると考えられる。

そこで本研究では、ポスター等の配布、掲示方法によって、Web ページの閲覧行動に差がみられるかを明らかにし、大学の構成員に対する効果的な広報方法についての分析をおこなった。

2. **IR**×プロジェクト

IR×プロジェクトは、各部署と協働しながら、データを通じて阪大生がどのように学び、成長しているのかを明らかにするなど、大阪大学の活動に関するデータを収集、分析し、大学の改善に役立てていくことが目的となっている。また、「大学をデータでみる」習慣をつけるためのきっかけを作ることも目的となっている。

IR×プロジェクトでは、テーマを 6 種類(学生経験調査, 新入生, 図書館, 単位, 学生交流(留学生), キャリア支援)に決定し、各担当部署との協同で作業を行った。この 6 種類を月刊のシリーズとして、配布、掲示していくこととした。

ポスターの作成に際しては、他の掲示物や配布物に埋もれてしまわないようなユニークなデザインを採用した(図 2)。加えて、ポスターの配布、掲示に合わせてそれに対応したレポート用紙(図 1)を大学生協にて配布することとした。

3. 分析

ポスター等の配布、掲示方法によって、Web ページの閲覧行動に差がみられるかを明らかにするために、ポスター、レポート用紙に QR コードをつけ、どの QR コードからのアクセスがみられたかについて分析を行った。

加えて、実験環境として図書館を利用した。図書館の様々な場所(掲示スペース, 壁, トイレなど)にポスターを貼り、それらのどこからアクセスがあったのかを分析した。

さらに、Web ページにアンケートサイトを作成し、Web ページ閲覧者に任意での回答を求めた。回答項目としては、6 種類のうちのポスター(レポート用紙)を見たか、ポスターを見た場所はどこか、どのような方法で Web ページにアクセスしたか等を用い、Web ページのアクセス方法についての質問を行った。

(現在、データ収集のため、分析結果は当日発表する)



図 1. レポート用紙の例 (左:新入生, 右: キャリア支援)

4. 終わりに

本研究では、IR×プロジェクトとして、ポスターによる Web ページへの誘導が、ポスターの配布、掲示方法によって違いがあるのか否かについて分析を行った。

本研究では、Web ページへのアクセスによって、「大学をデータでみる」という行動が起こったと判断したが、実際に「大学をデータでみる」ために Web ページへのアクセスがあったのかは不明である。さらに、IR×プロジェクトの最終目標である、「大学をデータでみる」習慣をつけるという点が到達できたのかについても確認できていない。今後、アクセス後の行動変化の分析などによって、「大学をデータでみる」という習慣が確立されているのかを明らかにしていく予定である。

また、IR×プロジェクトでは、部局と協同作成も重要な点であると考えている。協同して作業を行うことによって、部局の「大学

をデータでみる」ことに対する意識を高めること、また、「大学をデータでみる」ことによって教職員や学生の行動の変化を促すことができる可能性についても認識されると期待している。IR×プロジェクトでの協同作成が、部局にもたらす効果の分析していくことも、今後の課題としてあげられる。

参考文献

[小林 15] 小林雅之: 大学におけるIR(インスティテューショナル・リサーチ)の現状と在り方に関する調査研究, 平成 24-25 年度文部科学省大学改革推進委託事業報告書, 文部科学省, 2015.



図 2. IR×プロジェクトのポスター